

長野県立歴史館たより

2023年 秋号 vol.116



信州やきものの紀行

～江戸から明治へ～





はじめに

「やきもの」と聞けば、越前・瀬戸・常滑・信楽・丹波・備前の六古窯や、美濃・京・九谷・益子・伊万里・唐津などの窯を思い浮かべる人も多くいるのではないのでしょうか。

「やきもの」は「土をこねて焼いたもの」という意味では、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器なども含まれるわけですが、それは、約16,000年以上前にわたしたちの祖先が生み出した画期的な発明品の一つでもあるのです。「やきもの」は、食事・煮炊き・貯蔵・運搬など多くの面で変化をもたらし、多種多様な製品が生み出されていきました。しかし、鎌倉時代から室町時代の信州では、各地の窯が減少していき、地元の「やきもの」がみられなくなっていきました。その一方、瀬戸・常滑・珠洲などの製品を多く取り入れている状況が遺跡の出土品などから判明しています。



常滑甕
(当館蔵)

信州の「やきもの」文化が再び花開くのは江戸時代になってからです。瀬戸・美濃地域に近い南信地域では飯田市を中心にいくつか窯が築かれ、その後、信州各地で「やきもの」の生産が開始され、地域の生活を支えていきました。

今回の企画展では、江戸時代から明治時代にかけて信州各地で作られた「やきもの」を一堂に会し、北から南にわたる数々の製品から、人々の交流や生活の様子を読み解きます。

信州各地のやきもの

南信地域は信州の中でもいち早く瀬戸・美濃地域から技術を取り入れました。飯田市の尾林で焼かれた古尾林焼は、窯跡の近くで発見された陶製の狛犬に「慶長14(1609)年」の年号が刻まれていることがわかり、この時期には操業していたことがわかっています。また、飯田や高遠では藩手がけた「御庭焼」として、風越焼や高遠焼が焼かれます。風越焼は信州でも数少ない磁器を焼いた窯でしたが、もともと材料となる陶石が産出しない地域であったため、産地から運搬せざるを得ず、経費がかさんでしまい、わずか数年で窯を閉じています。



陶製の狛犬
(飯田市美術博物館蔵・飯田市有形文化財)



浅間焼の雛道具
(個人蔵)

池田町の^{あいどうじ}相道寺焼については、1767(明和4)年、^{じんえもん}仁右衛門という人物が村内で取れた白土を美濃国の^{いぼやよへい}伊保屋与平に頼んで器を焼いてもらい、年貢の足しにしたいと庄屋に申し出た、という文書が残されています。操業が始まった年代がわかる貴重な「やきもの」の一つです。この相道寺焼の技術は、中信地域各地の窯元(浅間焼・^{あさまにゅうどう}入道焼・^{せば}洗馬焼)にも影響を与えてきました。そのなかでも浅間焼は飯田や高遠と同じ「御庭焼」として茶陶を焼いたとされていますが、雛道具や地元の浅間温泉の土産物なども焼いていました。

東信地域では主に上田と佐久でやきものが作られていました。信州各地の窯の多くが瀬戸や美濃地域から陶工を招いていたたり、製品にその影響が認められていたりするのですが、上田を代表する^{そめや}染屋焼と^{しもごう}下郷焼は、いずれも釉薬をかけずに焼き上げる(焼締め)手法の製品が見られます。これは、常滑の製品に近く、下郷焼については常滑から技術者を招いたとの伝承も残されているそうです。一方、佐久の^{まえやま}前山焼は、1786(天明6)年以前には操業を開始していたと推定されている比較的古い窯の一つで、他の地域ではあまりみられないオリーブ色の発色の製品が特徴的です。

北信地域では松代藩が主導して経営した窯で焼かれた松代焼があり、その技術の広がりを確認できる製品が各地に残されています。須坂藩では藩主・堀直格が江戸から陶工・^{ほりなおただ}吉向治兵衛親子を招



松代焼の徳利
(真田宝物館蔵)

いて作らせた須坂吉向焼があります。吉向はもともと京都・大坂で技術を磨いた人物で、茶陶を中心に美術工芸の要素が強い製品を作っていました。そして、高山村では須坂吉向焼を学んだ湯本角蔵という人物が、信州では産出量の少ない原料の陶石を村内で発見し、^{ふじさわ}藤沢焼という磁器の生産をおこないました。

やきものたちのいま

信州各地の「やきもの」は、明治時代以降に鉄道網が整備され、安価で良質な製品がもたらされたことで、その多くが姿を消してしまいました。しかし、地域の人々や博物館・資料館・美術館が今も守り伝えています。「やきもの」に芸術的な価値を求めがちな側面もありますが、その多くは生活に欠かせない日用品でした。今回の企画展では、信州の「やきもの」をぜひご覧いただき、当時の生活の様子に触れていただければ幸いです。

(柴田洋孝)

満洲国協和会関係資料より訃報書簡

(三石好夫父親あて)



写真1 三石好夫氏の訃報を伝える書簡

「拝啓決戦時局下皆様いかゞ御暮しの事ですか
(中略)親友三石君の父上様へ此の報を書く事は誠にしのびません」との挨拶で始まる書簡(写真1)は、屋代(現千曲市)出身の春日武氏が、満洲の任地から友の父親に宛てた訃報です。

当館が所蔵する「満洲国協和会関係資料」は、満洲国協和会(満洲国の国家建設・動員に深く関わる存在として関東軍により作られた団体)の部員補として三江省通河県本部に勤務し、1945(昭和20)年4月4日午前5時ごろ、現地人の襲撃を受けて殉職した三石好夫氏の遺品類です。掲出の春日氏からの訃報をはじめ、好夫氏の父親が、同年6月6日に現地で行なわれた殉職者共同葬儀に参列し持ち帰ったものを、戦後、好夫氏の弟達がファイル等に入れ整理・保管してきました。2013(平成25)年2月に当館へ寄贈され、今年度4月、公開に至りました。

三石好夫氏は、1943(昭和18)年12月に上水内農学校(現長野吉田高校)を卒業したのち、満洲に渡り新京順天青年学校研究科第2部に入学しました。上水内農学校在学中の昭和17年にも、好夫氏は興亜学生勤労報国隊の一員として満洲に

赴いたこともあり、寄贈者である弟さんが思うに、満洲への憧れもあったようです。

好夫氏はいくつかの訓練機関や錬成所で学びながら、「⁽¹⁹⁴⁴⁾康徳十一年一月二十日」付で「満洲帝国協和会」の部員補という職に就き、同年5月18日付で通河県本部へ転任して「青少年班」を担当しました。この班は教育関係の部署だったらしく、資料群の中には、現地生徒の制作した絵画(写真2)や書写も含まれます。満洲での生活を語る資料は、生還者の多くが着の身着のままの帰国で持ち帰れなかったこともあり、極めて少なく大変貴重なものといえます。

生徒の作品や、遺されたアルバムに収められた写真は、平和な日常を想起させます。しかし、その中にあってこの訃報書簡は、「満洲(帝)国」の現実を、私たちに思い知らせることになるのです。

「満洲帝国協和会」の便箋にてつづられたこの書簡は、次の歌で締めくくられます。

建国の^(つ)聖業に^(は)たうれし親友の^(お)

報せをぞ書く 我れが心は

友の死をその父に伝えるにも言葉が見つからない、そんな苦しい胸の内が伝わってくる手紙です。

(鈴木実)



写真2 通河街公立協和国民優級学校生徒の絵

火砕流に覆われた遺跡

当館で所蔵している考古資料には過去の災害を伝えるものもあります。御代田町池尻遺跡では火山噴火の痕跡が残されていました。

平安時代も終わりに近づいた1108（天仁元）年7月21日（現在の暦では9月5日）、浅間山が大爆発し、火砕流が浅間山麓を飲み込みました。「天仁の大噴火」と呼ばれる、浅間山の過去2000年間で最大の噴火によるものです。

火砕流は、噴火により発生した400℃を超える流動化した火山噴出物が時速100km以上の高速で流れ下るもので、1991（平成3）年の雲仙普賢岳の噴火で火砕流の恐ろしさがクローズアップされました。天仁の大噴火により発生した火砕流は、「追分火砕流」と呼ばれ、御代田町東部から軽井沢町追分辺りまでを埋め尽くしました。

この時の火砕流の噴出量は、雲仙普賢岳の噴火の3倍、浅間山の噴火のなかでも最も有名な1783（天明3）年の大噴火の2倍に当たり、平均的な堆積は約8mというものすごい規模でした。

そのため、火砕流に覆われた地域では天仁の大噴火以前の地表面は厚い堆積の下にあり、遺跡の存在はほとんどわからない状況でした。そうしたなか、池尻遺跡では1994年の発掘調査で追分火

砕流に覆われた竪穴建物跡が発見されました。竪穴建物跡が見つかった箇所は火砕流の末端にあたるため、堆積が浅いところでは1mほどの厚さであったことが幸いしました。

竪穴建物跡は、2.54×2.28mと小型で、火砕流は竪穴建物跡の床面からではなく、埋土の上から堆積していることから、この竪穴建物が廃絶されて、しばらくしたところで天仁の大噴火が起きたものと考えられます。この発見によって火砕流の下には集落が確実に存在していたことがわかり、そして、火砕流に襲われなかった近接地では多くの平安時代の遺跡がみられることから、いくつもの集落が火砕流によって一気に壊滅してしまったと考えられます。

今も噴煙を上げ続けている浅間山。江戸時代に大災害をもたらした天明の大噴火からは今年でちょうど240年目となります。

「天災は忘れたころにやってくる」とは東京帝国大学地震研究所員として浅間火山観測所の設立に寄与し、浅間山の観測にも携わった寺田寅彦の言葉です。考古資料は、過去の災害を解き明かす糸口にもなるのです。

（櫻井秀雄）



発掘調査で確認された火砕流は深いところでは4m以上の堆積がみられた



竪穴建物跡の埋土の上に火砕流は堆積していた（白色の部分）



主張する古墳 — 新たなシナノの古墳時代像 —

をふりかえって



企画展示室（森將軍塚古墳パネルで古墳を体感）

「主張する古墳」が目指すところ

本企画展は、2023（令和5）年7月1日から8月20日までの期間で開催しました。

「主張する古墳」というタイトルに込めた趣旨は、これまでの古墳時代の解説に対する新たな挑戦でした。地域の古墳時代は、ヤマト王権や畿内王権と呼ばれるような中央勢力による支配の歴史として説明されることが多くありました。例えば「畿内王権の支配が及び、古墳が造られました。」という解説文を多く目にします。それは中央から見れば、必ずしも間違った解説というわけではありません。

しかし、中央勢力の支配だけでは、地域の古墳時代は語れないのではないかと、というのが本企画展の始まりでした。つまり、古墳を中央からの物差しで見ただけではなく、地域の視点からも考えてみようという試みです。

今回は特に、前方後円墳が造られなくなった長野盆地の5世紀に注目しました。そこで長野盆地の王は、馬生産を契機として畿内王権ではなく朝鮮半島の勢力と結びついたため前方後円墳を造らなかったと考えました。これまでの大型の前方後

円墳を頂点とした畿内王権の物差しだけでは、地域の古墳時代は語れないことを指摘しました。

この挑戦は、まだ道半ばです。地域の物差しで古墳時代の解説ができるように、地域の歴史をさらに充実していく必要があると考えています。

講座から現地へ

「わがまち自慢の古墳～実はすごい！長野県の古墳～」と題して、期間中4回の講座を行いました。講座では中野市・松本市・諏訪市・飯田市の文化財専門職員が各地の古墳の魅力や見どころを紹介しました。また、現地への行き方まで丁寧に説明され、受講者から「是非、行ってみたい」という感想もいただきました。古墳は、いつでも見ることができる目に見える埋蔵文化財です。現地を訪れ、多くの方の記憶に残ることが文化財保護の第一歩です。屋内での講座からいかに文化財のある現地へ誘うことができるのか、今後の講座のあり方について示唆的な企画となりました。

（石丸敦史）



多くの方に受講いただいた考古学講座



和田 英 ～糸づくりに懸けた明治の女性～



会期：令和6年1月13日（土）～2月25日（日）

近代日本の輸出主力商品であった生糸^{きいと}。幕末の蚕種改良^{さんしゆ}も含め、国の貿易赤字を全て補うほどの利益を上げた養蚕・製糸業の中心となったのは長野県や群馬県でした。しかし、信州や上州の名をかたった粗悪な品質^{ざくり}の座繰製糸が横行し、国際的な評価が下がってしまったため、明治政府は富岡製糸場の建設を計画し、全国に工女の募集がかけられました。フランス人技師らを招き、器械製糸の技術習得と富岡を範とする工場が日本各地に建設されることを期待したのです。しかし、「富岡へ行くと外国人に生き血を吸われる」といった風評が流れ、思ったように工女が集まりませんでした。



和田英ほか男児1名肖像写真
(長野市立博物館蔵)

1873(明治6)年、松代に生まれた当時16歳の和田(旧姓横田)英は、父の説得に応じ富岡行きを決意しました。幕末から明治初期の松代は、来航した外国船に対する警備や戊辰戦争の軍役、^{にせ}賈金の流布によ

る経済の混乱などで非常に困窮していたのです。英は地元松代の産業振興のため富岡製糸場で器械製糸の技術を習得、旧埴科郡西条村（現在の長野市松代町）に建設された六工製糸場をはじめとする県内製糸場で生糸製造や技術指導の中心となって活躍しました。和田英が指導した六工製糸場は、1904（明治37）年のセントルイス万博において大褒賞を受賞するなど、世界に認められる品質の生糸を生産するまでになりました。

和田英が記した「富岡日記」「富岡後記」は、

富岡製糸場及び六工製糸場における生糸製造や工女の生活を詳細に記したものであり、近代製糸業の実情を知る上で大変貴重な史料です。また、和田英と同時に富岡へ入場した春日蝶^{かす が ちょう}の書簡や富岡製糸場から発掘された史料によって、食事や休日の過ごし方など、当時の富岡製糸場に関係した人々の様子が明らかになってきています。

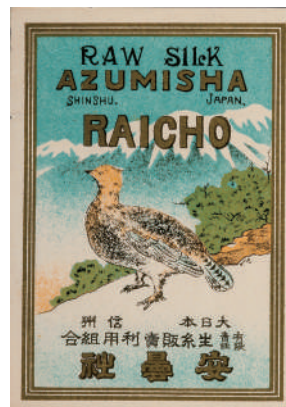


信濃国埴科郡西条邑六工製糸場乃図（当館蔵）

本企画展では、地元松代の産業を発展させるという強い決意をもって、新しい製糸技術の習得・教授という使命に果敢に挑戦した和田英という女性の人生を、英を育んだ松代や横田家、英の糸づくりに多大な影響を与えた富岡製糸場、開業150年となる当時長野県を代表する製糸場であった六工製糸場の資料によって紹介します。グローバルな変化に直面していた時代、明治の女性が地域の殖産興業に青春を懸けていた様子を感じていただければと思います。

また、関連展示として当館所蔵の生糸商標（輸出された生糸に添付されたラベル）の中から厳選した約70枚を展示します。それぞれの製糸場が工夫を凝らしたデザインをお楽しみください。

（内城正登）



生糸商標（当館蔵）

INFORMATION

インフォメーション

■2023(令和5)年 9月～ ■2024(令和6)年 1月の行事予定

9月

休館日
4～14
19・25

※ 9月4日(月)～9月14日(木)は
全館くん蒸のため休館となります。

講座・イベント

古文書講座

初級	A	第4回	9月17日(日)
	B	第4回	9月21日(木)
中級	A	第4回	9月16日(土)
	B	第4回	9月21日(木)
上級		第5回	9月30日(土)

県立歴史館出前講座①
in 大桑 9月16日(土)

10月

休館日
2・10
16・23
30

秋季企画展

信州やきものの紀行 ～江戸から明治へ～

10月7日(土)～11月26日(日)

■講演会

「やきものって何!? 縄文のビーナス
から善光寺寄進染付燈籠・・まで」
講師：仲野泰裕氏
(元愛知県陶磁美術館副館長)
10月21日(土) 13:30～15:00

■トークセッション

「松代焼の復興について
～唐木田又三の足跡～」
講師：唐木田伊三男氏(唐木田陶園)
柴田洋孝(当館学芸員)
11月11日(土) 13:30～14:30

■イベント

「やきものの体験！
～松代焼を作ってみよう～」
10月28日(土) ①13:30～14:30
②15:00～16:00
*各回親子10組(事前申込)

「やきものを撮影してみよう！」
開催期間中

古文書講座

初級	A	第5回	10月8日(日)
	B	第5回	10月5日(木)
中級	A	第5回	10月7日(土)
	B	第5回	10月5日(木)

古文書フォローアップ講座

上・中級	10月28日(土)
初級・ティーンズ	10月29日(日)

古文書探訪会
10月13日(金)

県立歴史館出前講座②
in 箕輪 10月14日(土)

開館記念日(森將軍塚まつり)
11月3日(金・祝)

特設考古学講座①
11月18日(土)

クリスマスリース作り
11月25日(土)

11月

休館日
6・13
20・24
27

12月

休館日
4・11
18・25
28～1/3



近世史セミナー
12月2日(土)

県立歴史館講座③
12月9日(土)

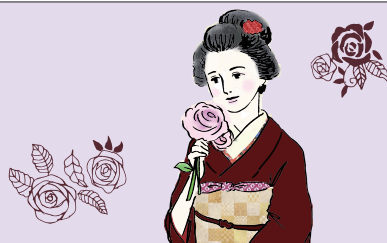
特設考古学講座②
12月16日(土)

1月

休館日
～1/3
9・15
22・29

冬季企画展

和田 英
～糸づくりに懸けた明治の女性～
1月13日(土)～2月25日(日)



表紙写真の解説

信斎焼 鼎形風炉(東漸寺蔵)

滋賀県信楽出身の陶工・奥田信斎が塩尻市洗馬で焼いた製品のひとつ。中国の青銅器などにみられる三つ脚の「鼎」と似た形をした茶風炉で、茶釜や鉄瓶が置けるような突起が取り付けられている。焚口と空気孔が顔のように見える独創的な意匠が特徴。

行事アルバム

***** 県立歴史館講座 *****



5月6日の笹本正治特別館長による「所蔵資料に見る戦国時代の信濃～武田氏を中心として～」を皮切りに、6月10日には県教育委員会文化財・生涯学習課指導主事の西山克己氏による「シナノから科野そして信濃へ～考古資料からみた信濃誕生～」が開催されました。長野県の歴史について、最新の研究成果を交えわかりやすく解説する県立歴史館講座が開かれ、多くの方にご参加いただきました。12月には3回目が予定されています。ぜひお申込ください。

***** 古文書講座 *****



今年度も古文書講座を開講しており、初級・中級・上級・ティーンズを合わせ170人程の方々が熱心に受講されています。古文書の字の形や読み方、史料の時代背景、他の参加者の発表など、参加者がそれぞれのレベルに応じ楽しみながら古文書に向き合う姿が伺えます。10月にはまとめとしてフォローアップ講座が講堂にて予定されています。

長野県立歴史館たより 秋号 vol.116

2023(令和5)年9月1日発行
編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市大字屋代260-6
電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail: rekishikan@pref.nagano.lg.jp
ホームページ: <https://www.npmh.net/>

印刷 奥山印刷工業株式会社